

1

次の文章は、北海道の牧場で育った少女まりもが、漆原という青年とエンデュランス（乗馬耐久競技）に参加している場面である。これを読んで、①～⑥に答えなさい。

注意① 解答はすべて別紙の解答用紙に記入しなさい。

注意② 字数が指定されている設問では、「」や「。」も一まず使いなさい。

ようやく谷底のポイント、スウィングング・ブリッジにたどりつくと、二人は馬を川の中に引き入れて脚を冷やさせ、鬱蒼とした緑に覆われた水場で十五分ほど休憩を取った。ヘルメットで水をすくって頭からかぶると、生き返ったような心地がした。

名前の通り、ゆらゆらと揺れる吊り橋を、曳き馬で慎重に渡る。そこから次のポイントのデッドウッドまでは再び急な登りだった。また嫌な名前だ。

足もとに気を配り、時計も睨みつつ、走れるところでは走る。赤茶けた大地に、まるで裸の人間の群れのように立ち枯れた木々が点在する。どこか他の惑星に来たかのような荒涼とした風景。まさに死の森としか言いようのない景色が続く。

チェックポイントを過ぎると、またしても溪谷の谷底へ向けて下っていく。馬もいかげん嫌気が差すのだろう、途中でどちらかが立ち止まってしまった。びに、もう一方が前へ出て、なおも先へと歩みを進めた。四十度近い灼熱地獄の中で立ちつくしては、あつというまに熱中症でダウンしてしまう。

すさまじく暑いのに、湿度が低いために汗などほとんどかかず、かいたとしてもすぐに蒸発する。知らないうちに脱水症状に陥ることのないよう、喉が渇いたと感じるより前に水を飲み、湧き水やせせらぎを見つけたら馬たちにも水を飲ませた。二人とも、漆原が日本から持参した熱冷まし用の冷却シートを首筋の動脈の上に貼っていた。それだけでもずいぶん違うのだ。

一步一步進みながら、あまりにも強く照りつける太陽にぼうっとしていると、足もとの砂利がずるっと滑る。日射しを遮るものはない。風もない。つづら折りの急な坂道を、ジグザグに行ったり来たり、時には後ずさりしてスイッチバックしながら登ったり下ったりする。

「そら、気をつけるよ、カメ。落っこちるなよ、カメ」

漆原がこまめに愛馬に声をかける。そうしながら、じつはまりもに言い聞かせているのだろう。

からからに乾ききった地面を馬のひづめが踏むたびに、白っぽい砂塵が舞い上がる。防塵マスクをすればしたで呼吸が苦しく、暑さは増す。

「もうちょっと速く行っていけど、カメ」

熱暑と緊張の連続に疲れきったまりもも、思わず力なく笑ってしまった。

「そんなふうには呼んだら、ほんとにのろまみたいで可哀想でしょ」

「なあに、いいんだ。こいつももうとっくに自分の名前はカメだと思ってる」

ふり返った漆原は、ふっと目を細め、マスクをはずした。

「楽しんでるか？」

急に訊かれて、答えが遅れた。

「うん」

「ここがいちばんしんどいんだ。頑張れ」

漆原には、みんなわかっているのだ。まりもは、こくりと頷いた。

④ 今年はまりもくんがいてくれるから、俺はずいぶん助かっている」

「どうして？」

「馬は群れの動物だ。一頭だけで走るより複数で行くほうが楽なんだ。途中で行く気をなくしても、こうやってどっか前へ出ることで引つ張り合えるしな。それに、俺としては正直、まりもくんの前であんまりかっこ悪いところは見せられない、いいかっこしなくちゃいけないと思うと、いつもよりうんと頑張れるってわけだ」

「それって、やせ我慢って言うんじゃないの？」

まりもが訊くと、漆原は笑った。

「そうとも言うが、いいじゃないかそれで。」

⑤ と言うだろう。誰だつて、四六時中、理想の自分であることなんかできやしない。かっこ悪くて情けない自分があるのをわかっていながら、せめて周りの人間にはそれを見せまいとして歯を食いしばる意地みたいなものが、俺はけっこう大事だと思うんだな」

なんとなくだが、漆原の言おうとしている意味はわかるような気がした。必死のやせ我慢を意地で保ち続けているうちに、それがいつのまにか本当になることはあるのかもしれない。いつか貴子に言った（もっと強くなりたい）という思いも、あきらめずに頑張つて胸に抱き続けていたなら、いつかそうなる時が来るかもしれない。

「日が傾けばずつと楽になるからな」

漆原が励ますように言った。

「俺はね、まりもくん。辛い、しんどいと感じる時ほど、天から意地悪く試されてるんだと思うことにしてる」

「天から？」

「そうだ。力を全部出しきつてもないうちに、負けを認めるのは癪だろう？中途半端は悔しくないか？」

「……そうだね。悔しいね」

「じゃあ、一歩ずつでも前へ進むしかないな。なに、大丈夫さ。終わらない日は絶対ないから」

出典 村山由佳『天翔る』

（注）曳き馬：馬をひいて歩くこと。

つづら折り：何重にも曲がりくねって続く坂道のこと。

貴子：不登校だったまりもを乗馬に誘った女性。

① ———の部分a・bの漢字の読みを書きなさい。

② ⑤に入れることばとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

- ア 笑う門には福来たる イ 情けは人のためならず
ウ 武士は食わねど高楊枝 エ 出る杭は打たれる

③ ⑥「みんなわかっているのだ」とあるが、どのようなことをわかっているのかを説明した次の文の□□に入れるのに適当なことばを、文章中から十四字で抜き出して書きなさい。
まりもが□□状態になっていること。

④ ④「今年はまりもくんがいてくれるから、俺はずいぶん助かっている」とあるが、漆原がこのように言った理由を説明したものととして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア まりもより先に限界を迎えるかもしれないという自分の不安を紛らわそうと思ったから。

イ まりもが自分の役に立っていることを伝えて、まりもの気持ちを奮い立たせようと思ったから。

ウ まりもに馬という動物が集団で行動する性質をもっていることを理解させようと思ったから。

エ まりもの不安をやわらげ、多少ペースを落としてもゴールインできることを伝えたかったから。

⑤ ⑤「漆原の言おうとしている意味はわかるような気がした」とあるが、これがどういうことかを説明した次の文の□□に入れるのに適当なことばを、三十五字以内で書きなさい。

かっこ悪くて情けない自分をわかっているながら、周りの人間には見せまいとするやせ我慢を意地で保ち続けるうちに、それが□□こと。

⑥ この文章の表現の特徴とそのねらいについて説明したものととして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア 漆原が馬に話しかける場面では、乱暴なことば遣いをしてみせることで愛情の深さをほめかしている。

イ 漆原がまりもに皮肉を言う場面では、まりもがほとんど口を開かないことで漆原への不信感を浮き彫りにしている。

ウ まりもが漆原に反論する場面では、自分の思いと反対のことをわざと口にすることで悔しさを印象づけている。

エ まりもと漆原の二人が馬で山や谷を越える場面では、大変過酷な状況であることを巧みな比喩で描写している。

受験番号
算用数字

次の文章を読んで、①～⑦に答えなさい。なお、本文を大きく四つに分け、それぞれを「1」～「4」としている。

「1」

① 悲しんだり泣いたりすることは、それほど悪いことでしょうか。そうではないはずです。悲しむのも泣くのも人間らしい自然の反応です。そして腹の底から笑うということと、こころの底から泣くということは、車の両輪のようにどちらも大事なことです。

A 悲しみや嘆きや絶望を知っている人だけが、本当の意味での B 喜びや希望を自分の手につかむ C ことが D できる。ぼくはやはり強くそう思ってしまうので

。「泣く」というと、メロドラマを見て涙腺をゆるめるといふふうに想像しがちですが、そうではない「泣く」もあります。たとえば、国のために泣く。世界のために泣く。世のため、人のために泣く。こんなにひどいことが行われていいのか、と正義のために泣く。いろいろな泣きかたがあります。つまり、泣くべきときにきちんと泣ける、ということは、とても大事なことです。

よく「カタルシス」という言葉で表現されますが、人は号泣することで、こころのなかのややもやしたものが洗い流されることもあります。泣くことや悲しむことで他人と共感しあうこともできます。人間はちゃんと泣き、悲しんだときには、ちゃんと笑ったときと同じように身体の免疫力も向上し、こころの状態もバランスを取り戻すのではないか。

「2」

人間は誰でも、ああ、もう生きているのはいやだ、というふうに無気力感を覚えることもあります。これを「こころ萎えた状態」ともいいます。「萎える」は、古い言葉では「しなえる」ともいう。ぐにやつと曲がることをいいます。花や野菜が時間が経たぐにやつとなつてしまうのも「萎える」という。人間も一日のうちで、一生のうちで、「こころ萎えた状態」をくり返し持つのです。

ああ、いやだな、と思いながら目を覚ます人もいれば、悶々と夜をすごす人もいる。そういうなかで、萎えた状態はよくない、と考えるのがいままでの常識だったのかもしれない。「しゃんとしろ」「がんばれ」というかけ声のなかで、人間は「こころ萎えた状態」を悪と考えるてきました。ぼくは、それも違うと思うのです。

「3」

北陸の金沢へ行くと、初秋から秋にかけての時期に「雪吊り」という作業が行われます。雪吊りとは、高い樹木などに支柱を立てて、上から傘の骨のようにロープや縄を降ろして枝に巻きつけて支えるものです。毎年、兼六園やいろいろな場所で、ピラミッドを思わせるような美しい三角形のデザインが生まれる。これは、金沢のシヨトウの風物詩として、アマチュアカメラマンなどもたくさん撮影に集まります。

なぜ、この雪吊りをするのでしょうか。日本海側に降る雪は、北海道などの雪と違って強い湿気を帯びています。べとべとして重い雪なので、松の枝や葉にすぐにくっつく。その上にまた雪が降りつむ。すると、ものすごい重さになる。しかも、その雪はなかなか滑り落ちない。

そのため、強くて堅い木ほど、つもった雪の重みに耐えかねて、夜中に枝が折れてしまうのです。むかし、深夜に兼六園の近くを歩いていたときなど、パキーン、パキーンと枝が折れる鋭い音があちこちで響いていたものでした。雪吊りすることでそれを防ぐのです。

その場合に、雪吊りが必要なのは強い木であり、堅い木です。逆に、竹や柳のように柔らかくしなうものには雪吊りはしない。そういう木々は、枝の上に雪がつもつてある重さになると、ぐにやつとしなつてその雪を自分で滑り落とします。そして、すぐに元に戻る。それをくり返しながら冬を耐え、やがて春を迎える。

要するに、しなうものや曲がるものは折れない、堅いものや強いものこそ折れる、ということでしょう。

「しなう」という言葉は「しなやか」という言葉にも似ています。ですから、「こころ萎えた状態」というのは、言い換えれば「こころがしなつていない状態」です。しなやかなこころの持ち主であるからこそ、こころが萎えるのだとも言えるでしょう。

「4」

いま、ぼくらのこころにも、この日本海側の雪のように重いものが日常的に

降りつもっています。毎日毎日ぼくらはその重圧と戦っているのです。ただ突っ張ってばかりいると、どこかではきんと音を立てて折れてしまう。逆に、こころが萎えた状態でしなつて、その重圧をスルリと滑り落としてまた元に戻るということをくり返す。そうしていけば、折れずに生きていけるのではないか。そんなふうに思うところがありません。

つまり、こころ萎えた状態で、「ああ、人生ってどうしてこうなんだろう。生きているのが面倒くさい」と感じるのは、しなつている状態だと受けとめればいい。しなうことによって、重く降りつもる風雪を振り落とせばいい。

いまの時代は、その降り積もってくる風雪の重みが、耐えがたいほどになっている時代です。それだけ人びとがストレスを感じている（大変な時代）なのです。それをすべて背負って抱え込んだままでがんばっていると、いつか必ず折れてしまうのではないか。

心療内科へ通わざるをえない人たち、あるいは生きていることのため息をつかざるをえない人たち。そういう人たちは、まさに「こころ萎えた状態」を感じている。それは、実はこころがしなつてきているというものであり、また、しなやかな生命力が残っていることだ、と考えてほしいと思います。曲がること、萎えること、そして、しなやかにしなうこともまた大きな力なのだ、と。

出典 五木寛之『不安の力』

① ———の部分㉔・㉕を漢字に直して楷書で書きなさい。

② ———の部分A～Dのうち、他の三つと品詞が異なるものはどれですか。一つ答えなさい。

③ 「悲しんだり泣いたりすること」とあるが、筆者が考えるその効果について説明した次の文のX、Y、Zに入れるのに適当なことをばを、抜き出して書きなさい。

こころのなかのややもやしたものが洗い流されたり、X こともできたりして、笑ったときと同じように Y も向上し、こころの状態も Z 効果がある。

④ 「雪吊り」を行う目的を、二十五字以内で書きなさい。

⑤ 「こころがしなつていない状態」とあるが、筆者はこれをどういうことだと考えているか。文章中から十六字で抜き出して書きなさい。

⑥ 「しなやかにしなうこともまた大きな力なのだ」とあるが、筆者がこのように考える理由を説明した次の文の□に入れるのに適当なことをばを、三十字以内で書きなさい。

□から。

⑦ この文章の構成と内容の特徴について説明したものととして最も適当なのは、A～Eのうちではどれですか。一つ答えなさい。

A 「1」は、「4」の結論に向けて、「こころ萎えた状態」の人が多くなつたという話題を提示している。

I 「2」は、「1」で提示された話題を受けて、いままでの常識的な考えに對する疑問を投げかけている。

ウ 「3」は、「2」で示された見方について、まったく逆の具体例を示して読者の疑問に答えようとしている。

E 「4」は、「3」で述べられた意見を受けて、同じようなことが過去にも起きていたと結論づけている。

3

次の文章は、吉田兼好の『徒然草』の一節と、その解説文である。これらを読んで、①～④に答えなさい。

受験番号
算用数字

技術に対する兼好の尊重は、その例をよく知られた「高名の木登り」の話(第九九段)に求めてもよいが、より適切な例として第五十一段を取りあげる。水車造りに堪能な宇治の里人の話で、宇治橋のあたりは急流に臨んで古来水車が多く、里人は水車造りの術に長けていたと言う。

亀山殿の御池に大井川の水をまかせられんとて、大井の土民に仰せて、水車を作らせられけり。多くの銭を給ひて、数日に営み出だして、掛けたりけるに、大方廻らざりければ、とかく直しけれども、終に廻らで、いたづらに立てりけり。

さて、宇治の里人を召して、こしらへさせられければ、やすらかに結びて参らせたりけるが、**①** 思ふやうに廻りて、水を汲み入るゝ事めでたかりけり。

万に、その道を知れる者は、やんごとなきものなり。(第五十一段)

「万に、その道を知れる者は、やんごとなきものなり」——ここで兼好の嗟嘆は、技術そのものの上に向けられている。そういう技術が工夫され、またそれを伝えるものがなければ、人間の生活はどんなにか停滞したものになるだろう。技術の重大さ、そしてそれを保持するものの価値を、大工や牛飼いや木樵のような下ざまの職人の領域をもあまわず、兼好ほど率直に認識した者も稀である。

しかし、『徒然草』における兼好の技術と芸能の道の讚美は、技術と芸能そのものよりも、よりいっそう、そういう**②** 技能の習熟によつて一芸に達した人に備わった心さまのよろしさに、向けられる。第九九段の「高名の木登り」の話も、「あやまちは、安き所に成りて、必ず 仕る事に 候」というこの男の体験より出た言葉が、「あやしき下臈」の言葉ながら、「聖人の戒めにかな」ったものとして兼好を感動せしめたのである。

(中略)

或人、弓射る事を習ふに、諸矢をたばさみて的に向ふ。**③** 師の云はく、初心の人、二つの矢を持つ事なかれ。後の矢を頼みて、始めの矢に等閑の心あり。毎度、たゞ、得失なく、この一矢に定むべしと思へと云ふ。わづかに二つの矢、師の前にて一つをおろそかにせんと思はんや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師これを知る。この戒め、万事にわたるべし。

道を学する人、夕には朝あらん事を思ひ、朝には夕あらん事を思ひて、重ねてねんごろに修せんことを期す。況んや、一刹那の中において、懈怠の心ある事を知らんや。何ぞ、たゞ今の一念において、直ちにすする事の甚だ難き。(第九十二段)

これは、弓道の技術を語ったものではない。技術というよりは心構えの問題であり、その心構えも、単に弓道という狭い一分野を超えた、人間の生き方の根本にかかわるものであると判断するところに、兼好の感動がある。ここで弓道はいわば餌である。発端であり、話の順序である。**④** 兼好のほんとうに言いたかったことは、「道を学する人」以下の第二段落にある。「道を学する人」——この道は「まことの道」、仏道を意味し、学道の人とは、生死にかかわる難問を前に怠りなく励む者を言う。学道の人は懈怠なく勉めるが、彼には朝があり夕べがあり、その繰り返しがある。そうであるから、そういう持続と反復の余裕を心に持つ者にとつて、弓の師の言うごとく一瞬のうちにおいても油断の生じるものであることを自覚するだろうか。なんとしても、この前後なき現在の瞬間の意識においてただちに事を行わねばならないが、そのことが実際においていかに困難であることか。ここに、『徒然草』本来のモチーフである「たゞ今の一念」が提示され、それはただちに、第九八段、「されば、道人は、遠く日月を惜しむべからず。たゞ今の一念、空しく過ぐる事を惜しむべし」の切言に接続する。

微々たる弓道の一局所を語って、兼好の指差すところは「道を学する人」の道である。兼好が技術と芸能にかかわる「万の道」に関心をよせるのは、技能それ自身のめでたさに加え、それが生死にかかわる「まことの道」のたよりともなるためであることはすでに言った。第九十二段はまさしくそういう兼好の意のあるところを、弓道の師範の言葉を借りて語っている。

出典 上田三四二『徒然草を読む』

(注) 亀山殿：後嵯峨上皇が嵯峨に造営した御所。

水をまかせられん：水を引き入れよう。

やすらかに結びて参らせたりける：やすやすと作り上げてしまった。

めでたかりけり：みごとであった。

嗟嘆：とても感心して褒めること。

諸矢をたばさみて：二本の矢を持って。

等閑の心：いいかげんにする心。

たゞ：ただ

懈怠の心：怠ける心。

期す：期待する。心の中で計画する。

一刹那・一念：きわめて短い時間。一瞬。

① 「**①** 思ふやうに」の読みを、現代かなづかいを用いてすべてひらがなで書きなさい。

② 「**②** 技能の習熟によつて一芸に達した人に備わった心さまのよろしさ」とあるが、これを説明したものととして最も適当なのは、**A**、**ウ**のうちではどれですか。一つ答えなさい。

A 技術と芸能そのものではなく、その技能を極めた人のものの考え方がすばらしいということ。

イ 名人がいなければ世の中はうまくいかず、その技術は人間の生活に欠かせないということ。

ウ 低い身分の者でも、それぞれの一芸に秀でた者に対して、率直に感動するべきだということ。

エ 技能の習熟度合いは、一芸を極めることができたかどうかで評価されるべきだということ。

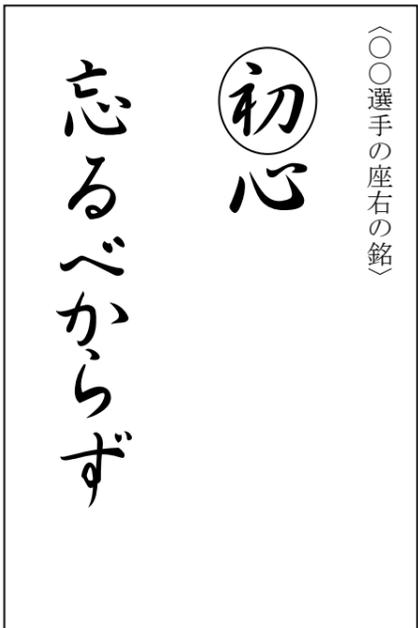
③ 「**③** 師の云はく」の内容はどこからどこまでですか。最初と最後の五字を、それぞれ古文中から抜き出して書きなさい。

④ 「**④** 兼好のほんとうに言いたかったこと」とあるが、これを説明した次の文の **X**、**Y** に入れるのに適当なことを、**X** は解説文から五字で抜き出して書き、**Y** は解説文のことばを使って二十字以内で書きなさい。

まことの道(仏道)を学ぶ人は、朝夕修行に励むという **X** のうちに油断が生じがちであり、何事においても **Y** ということ。

中学生の中川さんは、「最近聞いた印象に残ることばを発表しよう」という課題について、あるスポーツ選手が取り上げたことばに関心をもち、調べて発表した。次の【中川さんの発表】と、発表に対する【前田さんの意見と質問】を読んで、①～④に答えなさい。

【中川さんの発表】



〇〇選手の座右の銘

先日、ぼくの尊敬している野球選手が、新聞でのインタビューで、座右の銘として、「初心忘るべからず」ということばを挙げていました。その選手は、物事を始めたときの気持ちを忘れてはならないということを強調していました。また、自分がよい結果を出したときこそ、このことばを思い出して気を引き締めるのだと述べていました。選手の自分に対する厳しさを改めて実感して、このことばがとても印象に残りました。

そこで、辞書とインターネットで「初心忘るべからず」について調べてみました。このことばは、よく知られた世阿弥が芸術論を説いた「花鏡」の「一句です。混同しやすいことばとして「初志貫徹」がありますが、「初心忘るべからず」は、最初の目的を最後まで忘れずにいるということではないようです。

何かに取り組むときは、どんなに年月を重ねても、初めて体験したときのひたむきな姿勢を忘れず、向上心を持ち続けることが大切だということをおぼたことばだと思います。

【前田さんの意見と質問】

「初心忘るべからず」は、私もよいことばだと思います。中川さんの発表では、最近どういうところで聞いて、どう感じたかを話していたので、印象に残った理由がよく伝わりました。

ところで、中川さんは発表の中で、「初心忘るべからず」と「初志貫徹」では意味が異なると言っていました。「初心忘るべからず」とはどういうことでしょうか。「初志貫徹」とはどう違うのですか。

- ① 〈〇〇選手の座右の銘〉は行書で書かれている。〇で囲んだ漢字に表れている、楷書と比べたときの行書の特徴として適当なのは、ア～エのうちではどれですか。当てはまるものをすべて答えなさい。
- ア 筆脈にのってとめをはねたり、筆順を変えたりしている。
- イ 曲線的に書く部分が、直線を意識して書かれている。
- ウ 点画を連続して書くため、省略されている点画がある。
- エ 筆脈を意識して、とめがはらいに変化した部分がある。

② 「よく知られた世阿弥が芸術論を説いた『花鏡』の一句」とあるが、中川さんはこの部分で、「初心忘るべからず」ということば自体がよく知られたものだといいことを伝えようとしている。中川さんの伝えたいことが正確に伝わるように、「よく知られた」の位置を入れ替えてこの部分全体を書きなさい。

③ 【前田さんの意見と質問】の部分の、前田さんの意見の意図を説明したものと最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

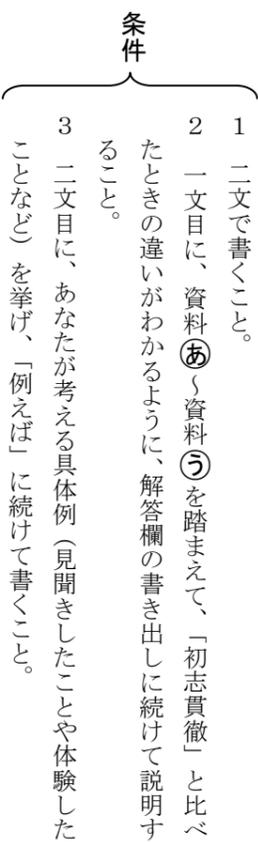
ア 中川さんが発表したことばを選んだ理由について、さらにくわしく聞き出そうとしている。

イ 中川さんの発表について、ことばを選んだ理由でわかりづらかったところを聞き直そうとしている。

ウ 中川さんの発表について、自分自身の体験を述べたうえで、共感したことを伝えようとしている。

エ 中川さんの発表で、ことばを選んだ理由が具体的であることがよいということを伝えようとしている。

④ 前田さんから出された質問に対する答えとして、「初心忘るべからず」とはどういうことかを、条件に従って八十文字以上百字以内で説明しなさい。



資料② 【世阿弥「花鏡」の解説文】

さるほどに、「**一期初心を忘れずして過ぐれば、上がる位を入舞にして、終に能下がらず。**」

〔訳〕このように、常に初心を忘れずに過ぐれば、位は上がり続け、最後まで能力は下がらない。

〔解説〕世阿弥は、「初心忘るべからず」はすべての芸能につながるとしている。若いころの未熟さや初めての心境を忘れず、限界なく向上していく大切さを説いている。

資料③ 【ことわざ辞典の記述の一部】

「初心忘るべからず」（中略）

〔注〕本来は能楽の芸について述べているが、あらゆる分野で物事をするときの姿勢や態度に通じる。

〔例文〕初心忘るべからずで努力を続けたい。

資料⑤ 【国語辞典の記述の一部】

【初志貫徹】

最初に決めた志を、最後まで貫き通すこと。

〔用法〕途中で希望を断たれそうなことがあっても、志をとげるような場合に用いる。